



～ ドック期間に出荷できるハウレンソウ品種 ～

島内自給用に供給できる野菜(特におがさわら丸ドック期間の生鮮野菜)の栽培は、生産者・消費者いずれからも要望が高く、重要な課題です。農業センターでは、こうした要望に緊急に応えるため、ドック期間(1/19～2/4)の野菜供給を目指したハウレンソウの品種比較試験を行いました。

気温の条件を考慮し、都内多摩地区の9～10月播種で多く使用されている6品種を試しました。おがさわら丸のドック期間中の収穫を目指し、11月中旬、下旬、12月上旬の3回の播種日を設定し、70cmベッド4条まき3cm間隔で手播き播種しました。堆肥1t/10a、タンカル150kg/10a(小笠原の土質を考慮して基準より多め)、燐加安42号100kg/10aを全区11月上旬に全量基

肥施用しました。目視で草丈20cm程度になった時点で収穫調査を行いました。

図1のように「デュエル」を除いては播種60日前後で草丈20cm以上に生育し、収穫適期を迎えました。ドック期間に最も適合したのは11月下旬播種でした。冬場でも生育が旺盛であった「クロノス」と「アグレッシブ」は12月上旬播種でも十分な草丈になりましたが、悪天候で播種が遅れる可能性を考慮すると11月下旬播種が最適といえます。

表1に11月27日播種の収穫物の形質を示しました。株重と葉枚数の充実ぶり(少ない株数で束が出来る)、葉色の濃さ、収穫開始1週間後の在圃性(草丈が伸びすぎないこと)などを総合的に判断すると「アグレッシブ」がお勧めの品種です。 <網野>

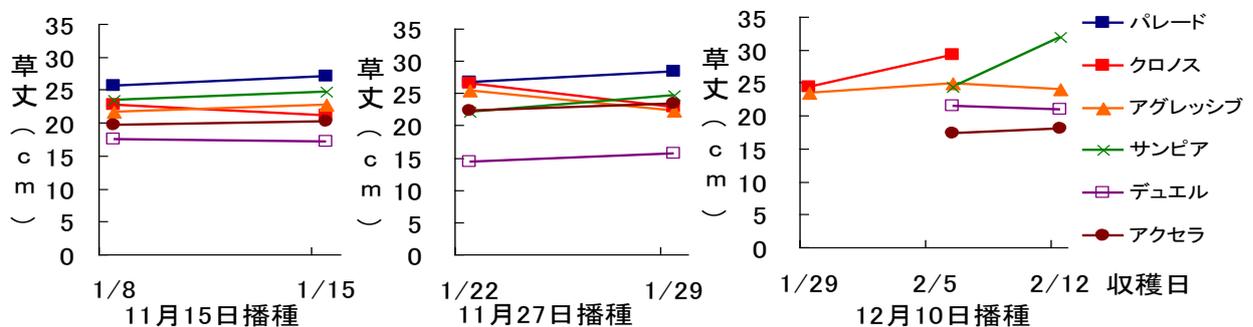


図1 ドック期間の出荷を目指したハウレンソウ6品種の生育

表1 11月27日播種ハウレンソウの収穫物形質

品種名(販売社)*	1月22日(56日目)収穫						1月29日(63日目)収穫					
	株重(g)	cv	草丈(cm)	cv	葉枚数*2	葉身率 葉色*3 (%)	株重(g)	cv	草丈(cm)	cv	葉枚数	葉身率 葉色 (%)
パレード(サ)	26.7	0.6	26.8	0.10	13.6	45.5 42.6	35.0	0.5	28.4	0.13	13.9	46.5 45.0
クロノス(サ)	18.5	0.4	26.5	0.11	10.1	43.8 52.8	17.2	0.4	22.9	0.19	12.5	43.9 52.0
アグレッシブ(サ)	28.2	0.4	25.4	0.13	15.2	46.8 48.4	21.7	0.5	22.4	0.11	14.6	44.4 45.8
サンピア(カ)	22.0	0.5	22.0	0.10	13.3	49.9 44.6	26.7	0.4	24.7	0.09	14.4	48.5 49.6
デュエル(タ)	4.2	0.5	14.4	0.14	11.5	46.9 28.8	5.5	0.7	15.7	0.17	10.1	43.2 26.9
アクセラ(タ)	14.7	0.5	22.4	0.19	10.0	46.6 44.4	19.0	0.3	23.4	0.10	11.8	49.5 44.4

* 販売社を頭文字で記した。サ:サカタのタネ、カ:カネコ種苗、タ:タキイ種苗 *2葉枚数は3cm以上のものを計数した。*3葉色はSPAD値

2013/10/11

～ 子どもたちに「食」の経験を ～

農業センターでは食育の一環として毎年、父島保育園の子供たちと一緒にジャガイモの植え付けと収穫を行っています。

12月上旬に年長児童が植え付けを行います。植え付けのポイントは植える間隔ですが、園児たちにもわかりやすいように、同じ長さの枝を用意します。枝を置きながらひとつひとつきれいに並べて、ていねいに土をかぶせて植えていきました。



写真1 芋植えの様子



写真2 芋ほりの様子

収穫は3月の卒園式の前に全児童で行い、掘り上げたジャガイモは、保育園で給食の材料に使用しています。自分たちで掘ったジャガイモは園児たちに大好評です。農業体験を通じて、畑の土に触れ、様々なことを感じ取り、食を学んでもらう良い機会になっています。

<網野>

～ ジャガイモに関する過去の研究成果～

ジャガイモ植え付けの季節が近づいてきました。春に収穫できる小笠原のジャガイモは実が締まっていて味が濃いため、「島じゃが」として大変人気があります。作り方も熟知され定着していますが、ここで改めて、過去の研究成果を紹介してみたいと思います。

農業センターで昭和51年に行った栽植距離に関する試験では条間60cm×株間25cm程度が適切であると結論付けています。40年近く昔の成果が、今でも小笠原のスタンダードとして生きています。また、コストの問題はありますが、昭和52年には、マルチ栽培で株間15cmにすると、定植50日程度の早掘りでも面積当たりの収量が確保できることを報告しています。

また、立川の東京都農業試験場(現農林総合研究センター)では、平成9年に秋作ジャガイモの種イモ重、芽かき作業の必要性について試験しています。小笠原の作型とは異なるものの、都内の秋植え時期は小笠原の定植期の気象条件に近く、参考にできます。

種イモ重は大きいほど可販イモ数、総収量が大きくなりますが、20g未満の小さな種イモも芽があれば一定の収量が得られ利用可能としています。また、1本仕立て(芽かきを行う)では大イモの割合が増えるものの総収量が劣り、芽かきは直売向けの栽培では不要と結論付けています。

基本に立ち返り、今年の芋植えの作戦を再確認するのも良いかもしれません。<網野>

～ 平成 25 年度土壤診断結果報告(概況) ～

本年は7月9～11日に実施した分析を基に診断処方箋を作成して8月5日以降に配布しました。

今回の提出点数は、父島5戸15点、母島17戸63点でした。全農式総合分析装置等を用い、処方箋の基準値は東京都農産物施肥基準の小笠原赤色土を参照しました。

表1に、今回の典型的あるいは特徴的な事例を挙げてみました。

Aは、成分バランスとしては悪い状態ではありませんが、吸肥性の強い作物（パッション等）では、収量を上げていくためには、やや少ないリン酸や石灰（カルシウム）などを添加して、良好なバランスを保つ施肥設計としましょう。

Bは、加里（カリウム）が基準値の5倍以上あります。栽培履歴から、牛糞堆肥の過剰投入にあると考えられます。堆肥の投入量に注意が必要です。

Cは、pHが高く中性域ですが、石灰が基準値の1/3位です。土壌中の有機物（腐植）が少なく、保肥力や緩衝能が低下していると考えられます。堆肥等を積極的に利用して土壌の能力を高める工夫が必要です。

Dは、石灰成分が少なくpHが低い酸性土です。石灰資材（消石灰や炭カル等）を施用して酸度矯正を行うとともに、加里が基準値の2倍位あるため、加里成分の過剰施用に要注意です。

Eは施設内の土壌で、ECが高く、加里が多く残り、pHも低く酸性状態で、施用した肥料成分が効率良く使われていない軽度の塩類集積状態です。対策としては、有機物施用による緩和と深耕による拡散、そして緑肥栽培による余剰分の吸収です。

全体を通じて、施設内の土壌で加里が多く残っている状態が多いようです。

加里の測定値が高い畑では、加里成分を多く含んだ肥料や堆肥の施用量を控えるとともに、加里は栽培中に作物の生育状況を診て追肥として施用しても効果があります。必要最小限の施用量としていくことが肝要です。

施肥に「足し算」はあっても「引き算」はありません。一作に与えた肥料成分は一作で使い切っていきたいものです。

＜営農研修所 藤本＞

表1 土壤分析結果の例

項目	pH	EC	リン酸	加里	石灰	苦土	Ca	Mg
	ペーハー	電気伝導度	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO	／Mg	／K ₂ O
基準値	6.0～6.5	0.1～0.5	20～80	50～60	250～350	50～80	3～6	1～2
A	5.8	0.2	17	48.3	222	69.5	3.1	1.4
B	6.3	0.5	37	339.3	307	60.1	5.1	0.2
C	7.1	0.5	16	88.2	91	59.1	1.5	0.7
D	5.4	0.4	50	112.9	101	79.5	1.3	0.7
E	5.5	2	63	128.8	340	68.8	4.9	0.5

～ 教えて！研究トピックス（自生種編）～

農業センターでは、小笠原自生種に関するさまざまな試験研究を行っています。現在は、島内道路河川の公共工事での自生種利用について研究課題化を行うことを検討しています。公共工事における自生種利用には、主に法面緑化と街路樹の2つが想定されます。特に、街路樹には、安全性が高く、景観がよく、管理しやすい樹種が求められます。現在はタコノキ、トックリヤシ、ハイビスカス、ホウオウボク、テリハボク、モモタマナ等の利用が多いのですが、それ以外の新たな自生

種の利用可能性について検討する予定です。

また、テリハボクやホウオウボクの巨木化は、道路管理上の課題の一つですが、樹容積抑制効果が期待できる根域制限栽培技術の開発を検討しています。

なお、島内公共工事での自生種利用を進めるにあたっては、島内生産者からの種苗の安定供給が必要になります。関係機関・部署と連携し、種苗の効率的な増殖方法や流通体制の整備も含めた検討を進めてまいります。

<池田>

～ 農業者セミナー開講のお知らせ ～

農業センターでは、意欲的な農業者を対象に「農業者セミナー」を8月から開講しております。今年度は、島外講師による講義が中心となります。受講を希望される方はぜひご参加下さい。今後の計画は下記の通りです。

《10月》「農業経営」

父島：10月21日（月）（※父島のみ開催）

講師：営農研修所 藤本所長

《11月》「農業資材の活用方法」

父島：11月21日（木） 母島：22日（金）

講師：東京都農林総合研究センター園芸技術科野菜チーム 野口主任研究員

内容：小笠原では情報の少ないマルチや遮光資材等の農業資材の活用例を紹介します。

《12月》「施設園芸における環境制御」

父島：12月11日（水） 母島：12日（木）

講師：東京都農林総合研究センター 島地副参事研究員

内容：ハウス内の気温などの環境を制御する技術を紹介、解説します。

《1月》「農産加工と関係法令」

父島：1月16日（木） 母島：17日（金）

講師：東京都農業振興事務所振興課技術総合調整係 野地担当係長

内容：農産加工品の販売時に必要な表示内容と関係法令について解説します。

《2月》「食品加工」

父島：2月21日（金） 母島：22日（土）

講師：東京都食品技術センター 三枝所長
内容：加工場の運営に必要な基本的事項や、ジャムやピューレなどの加工方法について解説します。

開催時間は、前月の開催時または村民便りで告知します。参加を希望される方は、農業センター（担当：窪田）まで、電話またはFAXでお申し込み下さい。 <窪田>

農業センターニュースは小笠原亜熱帯農業センターのホームページにも掲載しております。

検索

小笠原支庁 → 小笠原亜熱帯農業センター → 農業センターニュース